Vol. XV, Pt. 4, 1964

蝶と蛾 Tyō to Ga

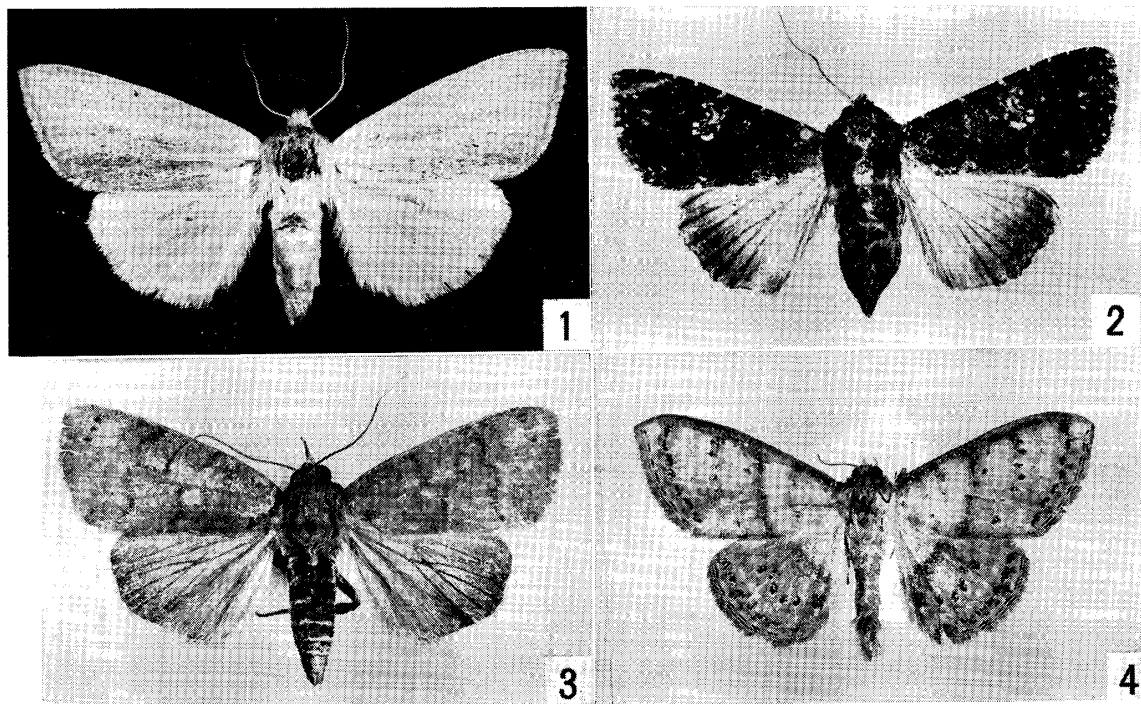
(Transactions of the Lepidopterological Society of Japan)

九州彦山で採集された日本未記録のヤガ数種

杉　繁　郎[1)]

On some unrecorded species of the Noctuidae collected by Dr. H. Kuroko on Mt. Hikosan, North Kyushu

By Shigero Sugi

最近私は九州大学農学部付属彦山生物学研究所の黒子浩博士の御好意で，主として同博士が彦山で採集されたヤガ科の稀品若干を調査する機会を与えられた．そのうち明らかに新種と認められるものを除き，ここに取扱う4種のうちの3種は従来全く日本から記録のなかったものであり，1種は過去にただ一度本州から記録があるが日本ではほとんど知られていなかった種であることが判明したので，ここに写真を付して記録しておきたい．貴重な標本の研究を委ねられた黒子浩博士には厚くお礼申上げる．

1 *Timora tosta* (Moore) トガリウスアカヤガ♀ (×1.7)
2 *Perigea atronitens* Draudt セブトシロホシクロヨトウ♀ (×1.7)
3 *Maurilia iconica* (Walker) チャオビリンガ♂ (×1.7)
4 *Homodes vivida* Guenée ニジオビベニアツバ♂ (×2)

1) 東京都大田区大森北4丁目14-12

Subfamily Melicleptriinae タバコガ亜科

Timora tosta Moore トガリウスアカヤガ（新称）

Proc. zool. Soc. London, 1888 : 411.

♀, 22. viii. 1954 (H. Kuroko).

触角は糸状，頭頂及び胸背は一様に淡灰褐色，前頭と下唇鬚側面はやや紫褐色をおびる．前翅は翅頂やや突出し，外縁は後縁角近くまでほとんど直線状を呈する．前翅々表は淡い灰色ないし灰褐色で，わずかにピンク色をおびて見え，前縁は淡黄色．中室部及び中脈の下方では翅の基部付近から外縁にかけてやゝ帯状に淡黄色を呈するほか後縁に沿う部分は幅ひろくやや褐色をおびている．検鏡すれば翅表には微細な暗色鱗片を散布している．全く無紋であるが，この標本では翅脈上外横線部にごくかすかな褐色の微小な点列を現すが，前縁部では認めがたい．縁毛は黄白色で基部には濃いピンク色の細線を走らせるが，後縁角付近では縁毛の先端まで濃いピンク色を呈する．後翅はほとんど白色に近く，淡い黄白色をおび，横脈紋又は横線を現さない．縁毛も白色である．裏面前翅は黄白色で翅脈は暗色．前縁部は黄褐色でピンク色をおびる．後翅は前縁角付近でややピンク色をおびるほか表面とほぼ同様である．開張 36mm.

本種は日本産ヤガの中では *Adisura atkinsoni* Moore アカヘリヤガともっとも近縁でかつ似た外見を示すが，一そう大型で翅頂がより強く突出すること，前縁部が濃いピンク色をおびないこと，外横線部に明瞭な黒点列を現さないこと，後翅が一そう白色でピンク色をおびないことで区別される．また本種では前脚の脛節の末端に強壮な2本の爪（claw）を具えるが，これはアカヘリヤガには全く欠いており，属 *Timora* と *Adisura* の重要な区別点となっている．属 *Timora* は主としてインドを中心に多数の種を分化しているが，東亜ではほとんど記録がない．本種をインド北部に産する *tosta* に同定したのは主として Hampson (1903) の検索表により，またすでに Wileman (1911) が大和吉野で1899年8月に採集した1♀をこの名で報告していることから一応この処置をとったものである．

本種は以上のようにきわめて稀な種と思われるが，その外見が一見イネヨトウなどと誤認されやすいので，今後の注意によって♂の発見が期待される．

Subfamily Amphipyrinae カラスヨトウ亜科

Perigea atronitens Draudt セブトシロホシクロヨトウ（新称）

Mitteil. Münch. ent. Ges., 40: 94, pl. 6:17, 1950

♀, 8. x. 1953 (H. Kuroko).

頭頂，頸板の鱗片は灰黒色で黄褐色を混じている．下唇鬚側面も灰黒色で，環節の端部及び第2節の下縁は黄褐色を呈している．肩板はほとんど灰黒色，胸背も同様だが，前胸及び後胸の冠毛には先端に強く黄褐色鱗片を混ずる．胴部はこの属としては太く強壮である．前翅地色は濃いくすんだ黒褐色で光沢少なく，亜基線，内横線は前縁にある淡色影に発するがきわめて不明瞭である．環状紋も事実上ほとんどみとめられず，わずかに淡黄色の鱗片で示されるが環をなしていない．前翅後縁部は基部から外横線に至る間淡褐色鱗片を密に混じている．腎状紋はこの属に固有な白色の小点群に分裂している．外横線は腎状紋の上方前縁上にある淡色影から発し，微細な淡褐色の断続線としてみとめられるが明瞭ではない．外横線の外側には翅脈上に微少な小白点列を現わす．前縁部には翅頂に向って3個の小白点をもち，亜外縁線もまた不明瞭で，第2，4，5，6室内の小白色影で代表される．外縁には小室内に小白点列をもち，縁毛は黒褐色で各翅脈部に白色鱗片を混じている．後翅は淡灰色．翅脈は暗色，横脈紋はみとめられない．外縁部は幅ひろく黒褐色をおびる．外縁は暗色に縁どられ，縁毛は淡灰白色．裏面前翅は淡灰色，前縁部及び外縁部は暗色鱗片を密布し，亜外縁部には幅ひろい褐色帯が前縁から後縁まで走り，その内方にもこれと平行する褐色条が第2室まで走っている．横脈紋は暗色を呈する．後翅も地色やや淡色，横脈紋を欠くほか前翅と似るが，暗色帯は後縁角に向って消失し，その内側の暗色条は不明瞭で，第4脈付近で

消失している. 開張 35mm.

本種は日本産の *Perigea* の中では, 前翅が黒褐色を呈することでもっとも *P. cyclica* HAMPSON シロホシクロヨトウに似ているが, 体は太く強壮で, 前翅に銅色の光沢がなく, 各横線が不明瞭なこと, 翅表の淡色部が純白色でないこと, 環状紋が環をもたないこと, 後翅の基方約2/3が淡色であることによって直ちに識別される.

Perigea atronitens DRAUDT という蛾は比較的近年に DRAUDT (1950) によって中国の Hoeng-shan で採れたただ1♀ (20.v.1933, H. HÖNE leg.) によって記載されたもので, 彼の示した♀の写真とこの彦山の♀とはきわめてよく一致し, 外見に関する限り疑いの余地がない. 従って本種の♂はなお世界的に未知である.

Subfamily Westermanniinae リンガ亜科

Maurilia iconica (WALKER) チャオビリンガ (新称)

List Lep. Het. B.M,, 13: 992, 1857.

♂, 7. vii. 1956 (H. KUROKO).

♂の触角は微毛状, 下唇鬚末節は長く, 第2節とほとんど等長, 細く先端に向ってややふくらみ, 赤褐色で白色鱗片を混ずる. 頭頂及び胸背は茶褐色, 腹部背面は灰褐色, 胸部及び腹部腹面は白色, 脚部にも白色鱗片を強く装っている. 前翅地色はほぼ一様にやや赤味をおびた茶褐色, 各横線群は紫褐色である. 内横線及び外横線は平行する各2本の横線から成り, 内横線は中脈付近で外方に曲りのち更に内彎して後縁中央付近に終る. 外横線は第5脈及び第2脈付近で2回内方に彎入し, 後縁角付近に達する. 中室端付近には紫褐色の弧状紋をもつ. 亜外縁線は波状で前半やや不明瞭だが, 第7-9室内に直線状に並んだ3個の小黒点が顕著である. 外縁部は中央付近でわずかに紫褐色をおびる. 後翅は淡灰褐色であるが, 半透明状で翅脈は暗色を呈し, 外縁部はかなり暗色をおびている. 縁毛は灰白色. 開張 34mm.

属 *Maurilia* MOESCHLER は日本からは全く始めての発見であるが, 近縁の *Carea*, *Aiteta* などと共にインドマレー地区からアフリカにかけて栄えるリンガ亜科の1群を形づくるものである. 日本のリンガは, 全体的に見れば全く分布の周辺的な性格をもつもので, 日本を含む東亜特産の属, *Gelastocera*, *Macrochthonia*, *Hypocarea* などはおそらく上記の群と何らかの関係をもつものと考えられる. *Maurilia iconica* はインド, セイロン, ビルマ, マレー, シャム, ベトナム, スマトラ, セレベス, ニューギニア, オーストラリア, サモアに分布し, 日本の近隣では中国の中部からも記録がある (HAMPSON, 1912).

本種の幼虫はインドではすでに調べられており, その食樹は *Shorea robusta* (フタバガキ科), *Tectona grandis* (クマツヅラ科), *Anogeissus latifolia* となっている (GARDNER, 1941). 本種が日本の土着種であるか否かには若干の吟味が必要であるかもしれない.

Subfamily Othreinae

Homodes vivida GUENÉE ニジオビベニアツバ (新称)

Spec. Gen. Lép., 7: 280, 1852.

♂, 1. viii. 1951 (A. HABU); ♀, 7. viii. 1954; ♀, 21. ix. 1955; ♂, 28. vii. 1959 (H. KUROKO).

♂の触角は微毛状, 頭頂及び頸板は淡紅色, 下唇鬚側面は淡紅色, 胸部腹面, 前中脚側面も同様に淡紅色の毛で被われる. 胸背は橙黄色, 腹背は黄褐色で淡紅色の鱗片を密布している. 前翅地色は濃い橙黄色, 前縁は翅端部約1/5を除き灰黄色をおびる. 前縁の下部は翅端に至るまで淡紅色を呈し, 基部から内横線の基部までの間, 金属光沢のある紫紅色鱗片を帯状に連ねる. 内横線は地色よりも濃い橙黄色を呈し中室内及び第1脈上にはわずかに紫紅色鱗を混ずる. 中横線は紅紫色の金属鱗片から成り, 前縁の下で鋭く内方に曲り, 以下ほぼ直線状で後縁に到る. その外方中室端部には上角及び下角に各1個の同色の小点がある. 外横線は前縁の下で外方に斜走する紫

紅色鱗片に発し，紅色でジグザグ状だがあまり明瞭でなく，翅脈上に連なる紫紅色鱗片の点列で代表される．亜外縁線も同様に断続する紫紅色線列から成り，外縁より僅か内方にも同色の断続する細線列があるが金属光沢をもたない．外縁は暗紫紅色，縁毛は淡紅色を呈する．後翅も前翅と大体同様であるが内横線を欠き，外横線上にある紫紅色点列は前翅よりも一そう大きく，強く隆起して見え光沢が強い．亜外縁部，外縁及び縁毛は前翅と全く同じである．裏面は前後翅とも淡黄色で，淡紅色をおび，特に淡紫色の内横線から外方は一様に淡紅色をおびている．開張 27mm.

本種はやや特異な細い前翅をもち，翅頂はやや外方へ突出し，前後翅とも中室は小さく，その長さは前翅では翅長の約1/2，後翅では約1/3くらいであること，前頭中央には小さな円錐状の突出部をもち，その上方触角基部との間に横に走る畝状の隆起をもつこと，前後翅とも横線に沿って金属的光沢をもつやや隆起した鱗片群を有することなどから属 *Homodes* Guenée の1種であることが明白である．彦山の標本は属の模式種である *crocea* Guenée （ジャワ，セレベス，セイロン等に分布する）にもかなりよく一致するが，小型であること，前後翅の外横線上にも金属鱗片の点列があること，中室内及び中室端部に顕著な金属鱗片群をもたないことなどから Hampson (1894) に従ってこれを一応 *vivida* の方に同定したものである．既知分布はインド及びセイロンである．

この美しい小型のアツバは，彦山では数年にわたる間に4頭が採集されているので，今後の注意によってなお新産地が見付かるものと思う．

本文に記録した標本はすべて彦山生物学研究所に所蔵される．

ミドリシジミの新しい異常型

桜井乃木幸[1)]

An aberrant Form of *Neozephyrus taxila japonicus*

By Nogiyuki Sakurai

1964年7月18日，宮城県宮城郡七北町松森のハンノキの樹上で採集したミドリシジミ *Neozephyrus taxila japonicus* Murray のなかに新しい異常型と思われるものがあるのでここに報告する．

その個体はAB型♀で，翅表は正常であるが，裏面において後翅肛角部の橙赤斑が完全に白色におきかえられている．その他，裏面の地色が正常型に較べて心持薄く感じられ，又やや大形であるが，これは単なる個体変異の範囲にふくまれるものであろう．

写真は正常型との色彩の差を示したものである．

1）仙台市岩切入山83